



写真—奈良原一高

①通りに並ぶフィッシャーマンズ・ショップ。②③映画『幻の女』のワンシーンから、キオッジアの目抜き通りと、カフェ「シネマ」で意気投合したポール（ジャン・ルイ・トランティニャン・左端）とガラ（ラウラ・モランテ）とジャン。④海側から見たキオッジアの景観。⑤レストラン「ガリバルディ」の気の良いギャルソン。⑥映画のシーンそのままにたたずむ、カフェ「シネマ」。⑦船着き場の横にある「ホテル・グランド・イタリアーナ」のロビー。⑧「シネマ」に集う映画出演もした老人。

うことも、うなずける。
そして、キオジヨットを自負するマリオもまた、取りたての魚を炭火で焼いただけのシンプルなたたずむ、カフェ「シネマ」においてのいいレ스토랑、「ガリバルディ」で、こう言うのだった。
「人生は一度しかない。僕の仕事は、僕の人生を生きたことだ」
あまりに新鮮過ぎる焼き魚にレモンなんてかけやいけない、このパスタはすべて手作りなんだ、リキュールとシャベットを混ぜたデザートは食べてみる価値があるなどと細かくアドバイス

をくれるマリオは、その夜は、日本から来たセニョリータたちのおごりで、しこたまブランドーを飲み、酔いしれるのだった。
そんなマリオのキオッジア案内は、翌日から辞退して、町中を回ってみた。ローマの街と変わらない、カフェ、レストラン、チョコレート専門店から、アルマーニ、フェレなどのデザイナーものの扱うブティック、パリのシューズ・ショップなどが通りに並び港町とは言っても、リゾートをぜいたく気分でも楽しめる要素は満点だ。イタリア料理にしてもフアッシオンにしても、ローマより数段安く、数段クオリティが高い。イタリア観光のANA場と言っても良い。

店々を眺めながら歩き回らううちに幻の店「シネマ」を、キオッジアとソットマリーナをつなぐ橋のたもとに発見した。しかも、その店は、映画そのまま、「シネマ」の看板もそのままに、ひっそりとたたずんでいたのである。

『幻の女』のセットを、未だ当時のままに残しているのかと思えた。それほど何も変っていない店の回り、店内、そんな様子なのだった。

若い店の主人が出て来て言う。
「あの映画にこの店が出ていたことを知ってるって？ 日本人がそれを知ってるのかい、驚ろいたな」

次に、その父親も飛び出して来て同じくビックリした笑顔で握手をして来る。
「昔、この店は映画館だったんだ。だからシネマっていう名前にしたんだよ。アラン・タネルが突然やって来て撮影に使用したいっていうんで、喜んで承知した。本当は向いの店にしようと思っていたらしいけれど、このバーの奥の部屋から見える港の景色が気に入ったってことだね。撮影していた8日間、店は閉めちま



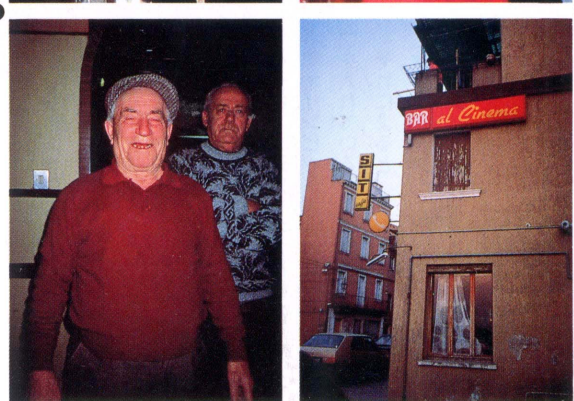
った。隣のスペースは普段使っていないかったんだけど、そこをレストランの様に仕立ててね。でも、それ以外は全部このまま撮ったのさ」
有名な監督や役者と一緒の8日間は夢の様に楽しかったと、親子は言った。

この店には、毎日のように、フィッシャーマンが集まるのだ。この日も皆でトランプに興じていた。ほとんどが老人である。しかし元氣そうで、よく陽に焼け、その顔には深い皺が刻まれているが、一様に男らしくやさしい表情だ。
その中の一人が近づいて来て話しかける。

「俺も出たぞ。その映画に。ほら、映っていただろう、この俺が」

この人、サンテは85歳のフィッシャーマン。映画の中の、この店でトランプをしながら酒を飲んでた老人なのだ。その時と同じアズキ色のクルー・ネックのセーターをこの日も着ている。目を丸くしている我々に大きな手を差し出し、ワッハッハと笑う。

この時間の流れが、キオッジアの人生



そのものなのだ、そう思える瞬間であった。

時代の流れと関係なく昔気質で生きていて、都に出て一旗あげようなどと欲を出したりせず、文明の産物にもそれほど興味なく、淡々と生きている。

最近、なかなかお目にかかれない、人間らしく男らしい顔した老齢の男たちの表情は確かにそう言っている。

*

キオジヨットたちの楽しみのひとつが、ちよつとオシャレして、夕方からめぬき通りをそぞろ歩くことだと、例のマリオが言っていた。確かに夕方から夜まで行つては返す街の人々と観光客の散歩は、祭りでもあるのかと、初めてこの地に着いた人間を驚かせる。でも、何も無い、ただただ、ブラブラと散歩する。

こんな人生がキオッジアのやり方だ。なんと、ぜいたくな、やり方であろうか。そして、イタリアに、こんな港町があることは、とても素敵なことである。